860
28
43

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-43

ガラス使用

前田流節付

平家物語

十一

860-43

○ 頼朝論

法大寺嚴修請

少將都歸

[illegible]

新都沙汰

葵 前

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-43

ガラス使用

頼政論

口説

さ為ばとに、永萬元年乃其
の頃より、主上御不豫の御事とぞ
きせ給ふ間ども其の始めよりも始めし
かば我の外に有りしせ給ひけり是に
よりて大義の古輔他の兼盛が娘

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-43
ガラス使用

容才詞

乃後に今上一の宮乃二歳にならせた
まふが清しくゐるを太子にこそ
のさせ給ふ歴れまし聞えしなどに
同じ比六月二十五日係に親王の宣旨
下させ給ふ七夜始て受禪有しか
バ天下何となふ　下ゲ　何とて堂清

さ清ありけりその体乃有職の人ぐ
中ニ何まれゐるハ　折声　先ず胡に童
帝乃何を尋ぬ清に清れ天男九歳
にして文法て宮の御日清りとうけ
させ給ふ是ハ彼関ニ且の成王にか
ありけり南面にして一日萬機の政をと

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-43
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-43

ガラス使用

まれ　初重　ずて其夜廣里ちの
世宣蓮臺聖のおく母恩山に網
絶奉まつ侍　口説　此葬送の夜
興極延暦寺ちの大瓜願ひ御論
といふものをしおいてたがいまちら
せれは及ぶ一天の君山前法王ちて存

御墓所へ渡し奉つ侍沐の組法は
南北二京の大瓜おとぐく仇なし
高　コハリ下ケ　此墓所の絶ぐりに家
寺ぐ乃家をうけるすけり
三重　甲　先聖武天皇の御願ひをし
屋紀寺おはれば東大寺の家をお

小京にハ　甲　奥福寺にむかへて見ん
暦寺の鄕をうけ　拾　次に天民
天皇乃御敕請和尚智識大師の
そうくとて国城寺の　呂　鄕をすす
物をを山門の大流　下音　いかゞ思ひ給ん
先例をとむいて　上音　東大寺の欲

奥福寺のうへに延暦寺の鄕をうけ
阿ばゞ南都の大流鄕やせ法しかゝ
やせましとせん義ありて京に奥
奥福寺のさいはん堂流観音坊勢
至坊とて安えたる大恵僧二人阿り
りり観音坊ハ黒京にどしの結巻

小白柄の長刀くはみじかかりし物を
坊ハ前黄匂ひの鎧着て赤く赤川の
大だ刀持らて二人法川と走りおゐん
暦寺の鎧を切て落しさんぐる
こちりこ通しや行ゐるハ瀬の水
日ハてりとも青へ淵とうしへとまや

し清く南都の庇徒の中へぞゆり
けり

徳大寺殿弱請

口説　徳大寺の大納言実定の江ハ平
家乃次男家盛の江ニ加階越し遠
させのいて大納言を辞して籠居
して相生しけるが方家せんと宣へ
バ御内の上下皆歎きかなしミ何ヶ

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-43
ガラス使用

ゐり其中に茂義人の大夫重兼と
いふ読大夫何り読年四十四歳なる人
にて五月なる何る月の夜徳大寺殿
南面の御格子揭させ月にうそむい
ておもしろ有へ茂義人法川と兼り
坐りたをと宣ひ重兼ほと中に

夜ハ来るるに姉はぬらんにいふ事ぞ今
何事ぞと宣へバ今夜ハ月さへ兼
おぼしもきみゆふまく兼てほと
中に徳大寺殿志んぬ姉なりなと
やらん今宵ハ世に清秋なるよと
ぞ宣ひなるむりし今の物語りども

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-43
ガラス使用

しめいて後小雅もやうく　下ケ
史行が清らく平家の繁昌を清
河りさ波を見るか　折声　嫡子ほげ
豊次男家豊左衛の大将まで河り
上中工
新宮之男知豊嫡孫ほ豊も
ウ分ウア　ウ　分ウア
どうし徒も是も次第かならば他

家の人は清大将か河り付べしとも
覚へば　下ケ　されば清ねのるまり
前家せんとどのこまいける　指声　夜
前人なるごをたらくとながいて
悪の所前家ゆらいに所周の上下皆波
どひものと始りゆらいなんば

白声　重蒐てを踊らしれまを案
じかしてゆらへ掛安藝の嚴島を
バ平家姫の兎姫らぞ何ゆらやまひ
中されは此家りゆらへり彼社は
関侍とてもて姫の舞姫ども多らは
ら後は兎ぞ志ら思ひまいらせて

もて姫しまいらせゆらりんぞらんさて
関侍ども何ものの此行誓やらんと弱祢
中ゆらいぞ有のまゝみぞ給せられ
ハツミ　ゆみ通し　口説　一七日ばかり
此家籠河川て扱此事の体家続の
関侍一友人都まて百人させなひて

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-43

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-43
ガラス使用

をせらる　指声　徳大寺の亭へいまし
させおはし法しやくにもてなさ
まほくに引き物おほしめぞおされ
白声　さて関侍どもまで乗りつらん
さる者がこ家らが主の西の東殿へ乗り
て有べきかとて入る所の亭へぞ

ハツミ　乗じ出る　口説　入る所にお唐
鞍面をうていふ関侍どもは何ものの列
乗どやと問ふへば徳大寺殿の出殿しぬへ
ほ乗り侍ふ者どにまれらがこ所を仕立て
一日所送り乗らせて侍らへはいかまりに
各殘れしおほしまりとてはいふ今一日所二

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-43

ガラス使用

嫡子主登門大臣の左大将まで まりく
は御を辞せさせ奉り 次男家をり
中納言の右大将まで おはせしを おいえ
させて 徳大寺を左大将まで なさ
ける 何れかし 出給 まりしひ 給
初重 新大納言は かゝらの 大りまと

をばしのはでよし 給給 諒及 起し
毎々 都所も子孫も 有りびなりを
うたてはれ

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』 請求記号 860-43
ガラス使用

少將都督

口說　正月下旬小丹波の少將成經平
判官康賴入道二人の人くに兆家の
玉麻淵の庄を立て都へといそぎれ
ゆれども餘事なれば志す編上を
いまく何道ゆれば何ぞ傳ひ請ばたひ

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-43
ガラス使用

少斗者

してまさしく從十日ばかりまで侍者の兒
鶴かゝ着のひぬそれより父大納言殿
乃御渡りけん形ゟ有木の別所と云所
ゟ郡祿入りて見るべき行の程ゆゑ有る
隆子なんどゝ書置のべき所等のまゝを
見のひて御まれ人の形見ゝは手詠り

返するまで形見書置ゝはいかで
ゟ見を見るべきとて康頼入道と二
人よみでゝ形見ないていよむ西元之
年七月廿日の日前家同じ月廿六日
下ケ 信俊下向とも書れたり掛ちを
源氏の厨信俊ゟ氣りたるをも志し

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-43
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-43

ガラス使用

折戸　袁紀にまぎりと那らせれし
法しるるものをば偽までも如何か
偽えらけなかりて何ひしかども
古語に任せぬられ所那の意にも
いるものもゆゑ　石説　[illegible]
へ流されてより後の偽りなさ一日所

時も人の命のいはてはすべきは
那りしかどもさほどの命は
消やらで十二とせを送りて今石
迄なりしさもなりまでは
ゆゑなどもまさしく父大納言殿の
十世に御らせなりんを見奉らせても

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-43
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-43

ガラス使用

行ぬれせさ勢前に御歌はくらせ七日
七夜が月　下ケ　念仏中御書て結歌
かハ大きな月卒都婆をたて立て　折声
通去雪夷お離生死證大業提と
りひて年号月日の下かハ孝子御
とかゝ通たれば　初重　賤山が川の

さく詠なれも子かゝ通るなれ
とて袖をぬらさぬハなりけり
三重甲　年まり　[illegible]通ども高通難
ハ拵育のむりしの恩　甲　首のさとく
清ばりしのさとし法御かゝ御ハ通ん
ばの今の那ぞ那り　下り　されバ之

世十方の仏陀の雪流もつゆれをたまひ
哀魂そうそうもいかにこしとおぼし
りん　初重　今暫くゆゑて急佛の
功をも法むぼうゆゑしかぞ都に
詩人どものさ詠めとなふゆゑん
初重　中音　まことを氣りゆゑは鬼とて

亡者にいと法中法なくくをこを
ぞ立れり草のうげにても名ざり
おもしろや思ひれりん　口説　同じ紀之月
十六日少将は今相へ何しのぞ思ふ
友夫納て殿の山庄さしまの殿とて
今相に何りさみ何らして年經

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-43
ガラス使用

かゝれば築地は何きどもあらひもなく
門は何きども扉もあらし庭に立いり
見のへは人詠ぬへて苔ふし池の左
里を　初重　見まるせば杜の山のする
風に白波たちかゝけて紫鶯
白鷗せうよくはゝせし人のさい

しさにたゞさせぬものは緑なり
口説　家は何きども探つ破きて蘇
風りたも苔へて如し家には大納言
殿の魂をもたるせしかけはまえを
ばかりてもあへかひしかの本をいみ
ばかりてもあへかひしかなんどいひて

下ケ　言葉に付ても只父のすをのこ
慈しがふことのことまひけれ
中音　深生中の古日なれば花は
たゞ花あり楊梅椰李のまゞへすを
わり志りがほにいろくかゝる　初重　むり
乃ゆすじは那られども其をとはれ

花那也や　下ケ　少那花の下に
折声　桃李ものいはれ来いくだくり
蓄ぬ深見んか詠那しむりしたれ
きんじ　下歌　古里の花の面
いふ世那りせばいふ　むりしのまとを
とる法し　指声　けたれ詩音を

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-43
ガラス使用

どのをもおほく越へ行りのかへし道なる
人々の心乃うちさこそハ嬉志くも
またあはれにも有乃史康頼が
逆ひも宗盛ハ有られども今さら
名おのわし起ふしてそれなハいのう
まで女房の車の後に乗て七条

河原までハおくられけりたゞひに
下ケ 行られなが程もやかぎり
なり 三重 甲 花の下の半日の客
月の前の一夜の友旅人が 甲 一村
雨の過行に 甲 一樹の陰にたち
よりて別るゝ名残も惜まるゝぞかし

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-43

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-43
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-43

ガラス使用

しむりしを思ひやり宝物集にいふ
物語りを書かるゝとしまゝへし

高倉の宮室城ち入給

口説　さるほどに宮ハ高倉を水へ近
来を東へ加茂川を　コハリヤケ　渡ら
せのひて如意山へいらせ相をしまゝ
三重甲　むりし清見原の天皇城流に
相をハ過させのひて吉野雲之

高倉宮周城寺入印

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-43
ガラス使用

いとせのひるにすそ乙女乃きぐらを
ばかりせのひるの姿也　甲　今は宮
乃御所りさ御もそれまハ世ぞ君の子
屋ぐらぐ　万り　志らぬ山路を御も
きぐらきるぐと見れいとせたまふに
いかなるかしの御事の姿也ハ御所し

より御御血ハいさごを染てくれ姿
井のごとし夏草の蔵えが中の
御かけさも花ことハ有せしものや松
都し百通の先　初重　かくしこの
喫方に之井ちへいとせ松もしまし
庶徒を粉んで入御すと給せられ

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-43
ガラス使用

ハ大氣大きに最まりよろしんぶの法
脇院に以前を志法しかたのごとく
乃依法し故免てまいらせ申り

彰都

口説　六月九日の日彰都の半始め
有べしとて半始めの乃奉行にハ他
大寺の左大将実定の口古法への宰
相乃中将通親の口とをきまえし
奉行の辨にハ左少辨行隆多く

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-43
ガラス使用

菊者

の宮人どもを引きして南国和
多の松原西の野をてんじて九条
の北をうち過ぎ一条より五条
までは其所所にてそれより下は
船より行す宮陽り氣にて汁中
拳事せらも過ぎりはれば其らば播

广乃印南船の粮拵津の国の昆陽
船のせんど答せんぞ　下ケ有し
かども事なく通し大見へぎりはり
中青　四船をばまでにあれぬ新
船は其ぞ事なりぞ所りとしける
人は皆所をうれ重の　中青　思ひと

那しもとは何かは何のは地をうし
なりけるを想へ今うたるへ人くは古木の
ほどしひをのゝ難きなへり 禮章 すべ
高口黄のやう那しし半だ那り
指声 古語門の宰相の中相通親の
仏の寛ひなるは 峯声 吳王りは

三条の廣路を見ひて十二の足う門
をたゝかしと見へたり 白声 いまんや五
条まて何らん都ふなどう内裏をば
立ざるべきかりぐまが星内裏法
ゝるべしとて五条の大納言邦綱
乃仏の里んじに関防の西をなり所て

どうしたんせうるべきよし入れおもえ
うらひ中されハウミ　当りけるしかや
口説　柳代郷総の所と中にはいならひ相
相犬様も者すてれしければ国衰
作りおきまんすたれに孫ども
いかんが国乃費へ民のまぼらひなる

国に諏かさし当たる天下の大事
大業為なんどの行はるべきをさし
れいてかゝ世の乱れに　遷
都造国衰少しもお慈せば
中青　いかしへのかしさに清代にハ来
相ハ国衰にかやをみに軒をぶるも

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-43
ガラス使用

そのへだ煙りのともし花を見のみ
御ふいかぎりなるみはぎものをも
中り　日御されより是川ち民を見
ぐみ国を助けるゆゑ依らせ給り
初重　楚章花の鬘をたてゝ
もいみんなりけ秦河房の殿を

れこしていい天下乱ましいり茅茨
まちばさいそんけづらば舟車飾
らば衣服文形りなる世も知りたん
ものを　初重中青　されば庭の大家の
驪山宮を作りて民のはぬへをや
たぐらせなひまりたん遂ふ是ん幸

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-43
ガラス使用

孝旨

なくしてまゐやうかさしも此心
ざし深うしざりしかバ主の女房も
石清ハ花ハ何て主のごとくなぞ
下ケいはれもて如しなるものうえの
謡詠ハいへるなるすなり　折戸　男を
うんでも素鉄さるなるすなれ女を

うんでも云さんさるなるすなれ男
ハ志ゑ志しかばかも有らぜられ花
女ハ妃たりとて后ハ立ていへり
指戸　先でたかりはる幸ひか如
け人女清后ともすてなされ玉母
但院ともすゞれなんぞとて甚

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-43
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-43

ガラス使用

抱バさまゐる　上敍　思ふまじいろか
おかゝり、家恋ハ物やれりかし人の
とゝまぐ　中音　冷泉のみれ出る
かさ是をあり法いぐ伴んの養の
前ハたゞハせたまゐが是を取て懐
かりかゝ取らち家見例ぬらぬ

心代あまりとて里へ　中ユマリ　かえり
うちかゝる五六日して俗ハ
如く如かゝり最り一日の恩のあハ
高ゞ百年の成を何やまゝ川たゞ根
乃事をや中ハ屋ハ　初重　むり
唐の大家の鄭仁基ゞ姫をどん

860
28
43

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-43

ガラス使用

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-43